

will は「だろう」か？——法助動詞 will の意味と用法

英語の助動詞のうち、動詞の原形とともに用いて可能性(possibility)や必然性(necessity)などについての話者の判断を表すものを**法助動詞(modal auxiliaries)**と呼びます。法助動詞には、**can, may, must, should** などのようにその意味・用法を日本語と対応させて理解することが比較的容易なものが少なくありませんが、その中で **will** は何となくモヤモヤした感じがつきまとっているようです。**will** は「未来を表す助動詞」と呼ばれることもあり、その用法の多くは未来の出来事に関するものです。そうした「未来の出来事」というのは一般に多少なりとも不確実・不確定の要素を含むので、**will** の意味を理解する場合、「・・・だろう／・・・でしょう」という日本語と対応させることがあるかもしれません。確かに **will** の用法の中には、そのような理解で間に合いそうに見えるものもあります：

(1) Tomorrow's weather will be cold and cloudy. (Leech 2004: 57)

(2) Tomorrow's high will be 25 degrees Celsius. (cf. ライトハウス和英 第1版, 「天候の表現(囲み項目)」)

これらは天候の予報の表現であり、事象の不確実性・不確定性が避けられないことから、日本語では(場合によっては)「・・・でしょう」のような非断定的な表現に対応しそうな気もしてきます。これに対して、次の場合はどうでしょうか：

(3) You'll feel better after this medicine. (Leech 2004: 57)

(4) He will help you if you ask him.

(5) There will be a fire-alarm drill at 3 o'clock this afternoon. (Leech 2004: 57)

(3)の場合、日本語では「この薬を飲んだら、あなたは具合がよくなるでしょう」とすることもできますが、「(この薬を飲んだら)具合がよくなりますよ」とすることもできます。(4)も同様に、「頼んだら手伝ってくれるでしょう」の代わりに「(頼んだら)手伝ってくれますよ」としてもかまいません。(5)の場合は、日本語では通常「今日の午後3時に火災警報の訓練があるでしょう」ではなく「訓練があります」となります。

これらからわかるように、「未来の出来事」を表す英語の **will** はいつも「・・・だろう／・・・でしょう」という日本語に相当するとは限らず、日本語では単に「・・・する／・・・します」という言い方になることも多いのです。これは、**will** と「・・・だろう／・・・でしょう」の意味の違いに基づくものです：

(6) will——<予測・予言(prediction)>を表す

(7) ...だろう／...でしょう——<推量・推測>を表す

すなわち、日本語の「・・・だろう／・・・でしょう」は<推量・推測>を表すので、**事象の不確実性・不確定性が意味の前面に出てくるのに対して**、英語の **will** は<予測・予言>、すなわち**未来の事柄**について「前もって述べる」ということを表します。その場合、「前もって述べる事柄」は「まだ起こっていない事柄」なので、その不確実性・不確定性が前面に出てくることもあります(例(1)(2)参照)、いつもそうではなく、不確実性・不確定性が背景化していたり、あるいは存在しないかのように感じられたりすることもあります(例(5)参照)。後者の例を追加しておく：

(8) My grandmother will be eighty on her next birthday.

(9) The officially recognized world's tallest broadcasting tower will open on May 22.

(「NHK WORLD ラジオ日本 Japan & World Update」より)

(8)(9)はそれぞれ、「祖母は今度の誕生日が来ると 80 歳になる」「世界で最も高い電波塔として公式に認定された東京スカイツリーは(2012 年)5 月 22 日にオープンします」ということで、不確実・不確定の意味要素は前面には現れていません(ただし、不確実性・不確定性が皆無というわけではなく、何らかの特別な事情が発生して事象が生じないことになってしまう可能性はあります)。この(9)は、すでに予定として決定された事柄を「ニュース」として述べているものです。このような用法の **will** は、いわゆるニュース報道以外の場合にも出てきます。たとえば人と待ち合わせをしているときに、何らかの事情が発生して約束の時間に遅れることになったという場合、相手に次のように伝えることができます：

(10) I'll be late. (ちよつと遅れます／ちよつと遅れるから(ね))

これは「遅れることになった」という状況変化がたった今発生し、そのホヤホヤのニュースをすぐに相手に知らせているものです。このような **will** は、**if** の節(条件節)にも生じることもあります：

(11) If I'll be late, I'll call you. (もし遅れることになったら、電話するよ) (ピーターセン 1990: 123-124)

(このような場合、(11)の形(=if 節の中に **will** を用いた形)ではなく、If I'm going to be late, I'll call you. というネイティブもいるようです。この **be going to** は It's going to rain. (雨が降りそうだ)の **be going to** と同じで、「このままいくと遅刻しそうだ」という意味です。「もし遅刻しそうな状況になったら電話する」ということです)